

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 伊勢物語論 : 論説  |
| Author(s)  | 白鷗生   |
| Citation   | 龍南會雜誌, 64: 26-63  |
| Issue date | 1898-03-30  |
| Type       | Departmental Bulletin Paper   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2298/5072">http://hdl.handle.net/2298/5072</a> |
| Right      |   |

はれて百花の下に光景を愛せんに、獨り異香を放てるものは、あゝそれ、一朵の櫻花にてあらんかな  
例を引き證を擧げなば或は明かならんも、多言繁稱は要なければ是に擲筆す

## 伊勢物語論

白 鷗 生

### 目次

- 一、緒論 物語
- 二、伊勢物語の題號
- 三、作者及年代
- 四、在原業平
- 一、經歷
- 二、性行
- 五、伊勢物語に現はれたる此時代の思想及風俗
- 六、伊勢物語の文學上及歴史上の價值
- 一、文學としての伊勢物語
- 二、歴史としての伊勢物語
- 七、伊勢物語の流布本及註釋書
- 八、結論

### 一、緒論、物語、

平安の朝凡そ四百有餘年世は全く安寧無事の間にあり内に政治上の混乱なく外に軍事上の動擾なく

天下は風波なき海面の如くにして滿朝の百官は唯優情放逸を是れ事とし花の朝月の夕詞藻を發して其才を戦はし愛戀の情を歌詠に發して其贈答をなす上の好む所亦之より甚しきものあり此を以て上下共に文弱に陥り爲に幾多の絢爛なる目を奪ふが如き文學は踵を接して現はれ我文學史上最盛の時期となり前奈良朝に旺盛なりし文學ハ更に世の風潮に従て進歩し萬葉調は變じて古今調となり古事記の文は變じて物語文となり奈良朝の樸訥雄健なる文學を陶冶し更に之を精練して之に華美艷麗を融化し爰に花の如く月の如き平安朝の文學は形成せらるゝに至りたり物語、日記、草紙、和歌集の類陸續として現れ來り殊に散文は此時代に於て特殊の發達をなしたり而して就中物語は最も此時代を代表する文學たるなり抑々此物語と稱するは話説の義にして日本書紀には談の字を用ゐ紀記の文中にも上古の傳説などを述べたるもの甚多し是れ即ち物語なり然るに奈良朝より平安朝に移るの間平假名の製作ありて長足の進歩をなさしめ其用法自在となり以て純粹なる國語を口に語るまゝ文章に綴り流麗なる筆を以て或は實事を直寫して記録とし或は虛實交々綜合して人生の一斑を述べ之に脚色を附えて世態人情の微を寫し微小の事實を誇大敷衍せるものとなし或は空中に樓閣を設け無常怪談愛戀の説を交へて巧に趣向を構へて世態人情を描きたりかく三種の物語は皆流麗なる文章を以て平和なす異なく放逸遊惰の佳人才子が消閑の料に充て其同情に訴へて或は泣かしめ或は笑はしめんが爲として苟も才筆を有せる者は爭て此等の作をなすに至りたり榮華物語大鏡の類出でゝは歴史の裏面を寫して一種の物語文の實錄となり竹取物語源氏物語出で其々所謂空中樓閣の記事を以てし一は素樸の筆にて文簡古に意緻密に寫され一は婉麗優美の筆を以て文意共に巧緻に描出されたり大和物語、今昔物語の類出で虛實相交へて當時の状態を寫し出でたり此の如くにして此等の物語は當時

の世態人情の極微を寫したるものなれば實に其文辭の雅致を賞するのみならず其記載の事實を咀嚼して社會の裏面をも觀察し得べきなり今伊勢物語は如何なる種類に屬するものか是れ大和今昔の類と共に論すべきものなり左に順を逐て之を明にせん

## 二、伊勢物語の題號

伊勢物語と稱する名に於ては古來諸說紛々として殆ど完説なし今其說を擧げて是非を論せん

袋草紙には『有密事之故爲構僻事之由號伊勢物語云々』といへり蓋し此書概ね男女の間贈答の和歌を以て埋め又は時代官位を故に記き僻めたる記事或は萬葉古今の歌を僅に一二言變じて之を本とえて物語を作りたるなどの事あり全篇殆ど僻事ならざるなきを以て諺に伊勢は僻事といふ意義よりまか名づけたりといふ事なり後世の學者も或は之を賛同する者あり契沖律師も聞き及ぶ所を書き集むれば定めて僻事多かるべと謙退して名けたるならんといひ眞淵翁も今昔物語に見ゆるを證とし其は藤原忠房、鴨長明、西行法師の歌に『伊勢人はひが事しけり』『伊勢ならばひがごと』などの事あるを見れば確なりといはれたり然れども其論する所謎に似て餘り附會に陥りたる如き觀あるを見るなり殊に其證として引用されたる歌も遙に後世のものにして果して此等の證となるべきものや否やは疑を存すべき所なりとす

上田秋成の『よしやあしや』には『伊勢國へ狩の使に行きし一條はいともはかなげに作りなし』が而白しとてかくやいひはやしつらん』といへり藤井高尙の伊勢物語新釋も之に賛同したる如く見ゆれども是又此一段に附きて此書の名となるまでの價值ある段なるやは疑を容るべき所なりとす

荷田春滿は伊勢齋宮の事所々に見えなればまか名づけたり大和物語は平安の事も多き大和の事も

記しあれば大和と名づけたりと同一例なりと稱せられたり是未だ漠然たるを免れず

此他賀茂春海の伊勢物語題號考にはえせ物語の轉音なりといひ又一説には伊勢國を妹背國といふよりなりといひ又は伊勢の御の作なるよりなりといふ如きは何れも確説ならざる如く殊に伊勢の御の作なるよりなりといふに至りては作者の名を題號となえたる例は更に此頃の物語にはあらざる所なればいふに足らざる説なり

要するに以上の諸説は近世の諸學者の稱せる所なるも皆確説といふべからず殊に假事物語といふ説は一般に信用し居るものゝ如し然れども前にも述べし如く頗る穿鑿に過ぎたる説といふべく其引證も精確といふべからざるなり近頃或學者の説によれば春滿翁の説を一步進めて論じたるあり『袋草紙に和泉式部の本によれば伊勢の狩使の事は初段にありといへり其他一二の書にも初段に見えたるありといふ而して此書は元來順序あるものならず一種の隨筆に止るものなるに後世業平朝臣が一生の事を書けるものと考へ初冠を初として之を殊更に現今の如く列したるなりされば其昔は伊勢狩使の段が最初に存したるなり故に初段にありたる所より此名を附したらん』と説きたる人あり是最も妥當の見なるべし元來此物語は源氏物語には在五が物語といひ狹衣物語には在五が日記と稱し更科日記には在五中將の集といへりしが如く其名は一定せざりしものゝ如く唯業平が折にふれて詠み出でたる歌に序文を附し順序をも定めずして書きたるものなりしに後の事を好む者が業平一生の記事なりとして特に初冠より初め辞世を以て終らしめたるならん且和泉式部本などの證より見て伊勢狩使の記事の冒頭にありたるは明かなれば之に因みて此名を稱したるは決して不當のことゝは見るべからざるなり春滿翁もいへり玄如く元來古は此の如き物語に命名するはいとかるき事なりとしたる

ものなれば此書の名も實に此書を命名せし初に伊勢狩使の條開卷第一にありしより此名を呼ぶに至りしといふ説最も近く且穩に聞ゆるなり況んや當時の他の物語の竹取、源氏、落窪、大和、今昔の如き皆其名の出でたる所さへ謎の如き深意より出でしものにあらざるに於てをや

### 三、作者及び年代

此物語の作者及年代に付ても古來一定の説なし然れども先づ袋草紙には『伊勢物語和歌二百五十首、業平朝臣所爲也、偏非彼人作歌耳、古今之間歌有興之書載歟、又不論自佗、隨使同人歌樣書列之、若是密事令混之故歟云々』とあり定家卿は又此物語の奥書に唯不審とのみ書きて之を斷定せず平田篤胤の古史本辭經には『業平朝臣のおもふ旨ありて自記せられし歌集にて在五中將物語といひえものなりしを後人の佗事を交へてかく名づけたるものならん』といへり伴信友の仮字本末には『此物語は業平朝臣思ふ所ありてわざと有りし事もあらまし事も心のねもひくまゝに自書せるし今はの涯の歌をさへに作りて書き載せ給へる書なるを後に佗人の書加へたる文のいさゝか交れる物なるべく推はかり思はるゝ』といへり其他細川幽齋の關疑抄、富士谷御杖の北邊隨筆加納諸平の伊勢物語論、野々口隆正の在五中將日記復古解の諸書は皆此説に賛同して然るべき理由を説明せり

然るに荷田春滿の伊勢物語童子問加茂眞淵の伊勢物語古意は業平が果して作りたりとすれば當時上には陽成上皇あり其御母后なる二條后高子との密事あるに之を世に示す事あるべからず徒に己の罪を發き其不徳の業を書す人あるべからず加之記事の中には業平の生前死後に亘りて時代の頗る違へるなどを以て業平の作ならざること明にして其作者は到底知るべからざる事を說けり是れ果して然らんか密事を明かにせりとて強ち然らずといふべからず現今の世にては不徳不義の事と思ふ事ある

も當時敗德亂倫の世に於て之かも業平は常に藤氏に對して反對政略を取りし時なれば焉ぞ此事なしと論すべけんや況や其當時既に世に廣く弄ばれしものなるや否やも知るべからざるに於てをや日本文學全書の解題には『この物語は在原業平朝臣がをりに觸れてよみおける歌心やりに書されかれし日記などの世に傳はれるを後の人のわざと作りかへて初冠より終焉まで業平朝臣の事のやうにてたしかにそれと定めがたく書き僻めたるものなりさればいづれか自記の文いづれか追記の條といふこと今更知らるべくもあらず但詞短くして趣長く之かも氣骨あるは勝れたる才學の人ならでは得能ふまじきなり』と記せり是れ初に述べける諸家の説より一層確なる妥當の説といふべきなり

蓋し業平の自記とすべき形跡何れの點を以て此書中にありとするやといふに古人もいひし如く此物語の中には惟喬親王、山科法親王、賀陽親王、藤原常行、藤原良近、在原行平の如き人物は正しく其名を記せるに獨業平朝臣に於ては其名を以てせず『近衛の司にさぶらひける翁』『右馬頭なりける翁』『殿上に侍らひける在原なりける男』など見え皆謙辭を用ゐたり定家卿の奥書にも『有謙退比興之詞等云々』と見ゆる如く大に其自記たるを證するに足るものなりされども後世の秀才が特に業平の爲に作りて其名を書僻めたるものなりといふ者あらん是れ決してさる事なきなり又何の故に此書に追記の條と思はるゝふしあるやといふに其年代時代或は業平の生前に亘り或は死後に亘り其文章も或は業平の作と思はれざる所あるを以てなり然れども全篇自記と思はるゝふし他に少しとせず又全く疑を容るべからざる所も少なからざるなり藤原兼範の和歌童蒙抄にも『業平が手づからかみや紙に書ける伊勢物語の朱雀院の塗籠にありけるには云々』と見え顯昭が古今秘註にも古今集より前なものとし伴信友も『古今集は此物語より載せられたるなりとは古今の詞書集中なべての例に似す

いたづらなることばかり長くて皆此物語に見えたる詞におほかた異ならざるを以て知るべし』と云ひたり古今集の撰まれしは業平の卒後二十年許なれば其頃既に在五中將物語として聞えしものならん此の如くなれば其大跡は自記にして悉く後人の書き僻めたるものども見得べからざる所なり而えて之に附加したる事實及詠歌は果して何人の手に成りまかは到底知る能はざるなり前の文學全書解題にもいへる如く才學俊秀のまかも氣骨ある男子の筆になりまなるといふは共に世人の稱する所なり復古解には一々之を自記の章なり追記の文なりと論せしは餘り穿鑿に過ぎたる次第なり又或説に伊勢御の筆ならんとせり定家の奥書にも『伊勢家集其端文跡偏以同之是又見先達舊記庶幾其跡歟兩不知之加之此物語名字非彼筆者何稱伊勢乎』などいへり然れども其時代の相違せる其文体の適強にして女子の文に似ず文体頗る老練の筆ならざれば得べからずと伊勢物語古意に詳く眞淵翁の論せられたるありて之を以てせば其説の非なるは火を見るよりも明なり

要するに此書の作者及び年代は確説とはなきなり日本文學史に『始め業平の書きたる日記詠みたる歌をば後の人の補ひ定めたるものなるべし』と見ゆるは少しく漠然たるが如きも最も妥當の見と思はるゝなり蓋し業平が折にふれ事に據して已が一生の間になまたる事實と之に關する詠歌とを日記の体裁を以て世に傳はりたるものを後に秀才達筆の徒が好事の餘に其日記に朝臣が歿後の事をも増補し又は之に臆測を加へ或は之を書き僻め業平朝臣一生の記事に花を飾り美を装ひ且は原文に説明なども附し以て時好に投じまかも専ら朝臣の文法に従ひ文体を擬して朝臣一世の事跡の如くなまて此一篇の物語を形成したるものならんかされば或學者の如く彼段は朝臣の自記なり此段は追記なりと故に之を區別して稱するは大に賛同を表し難き所なりとす又其年代に至りては其作者の年代



に伴ふものなれば作者にして十分明かならざるに於ては何ぞ之を知るべけんやされども其文章の遒勁にして簡潔なるは決して古今以後より距りたるものにあらず故に業平朝臣の才筆に加へて古今前後の俊秀なる男子の手になりしものなけんといへば略作者又年代に對して誤謬なからんか

#### 四、在原業平

##### 一、經歷

在原業平朝臣は淳和天皇天長二年四月一日を以て奈良の舊都に生る平城天皇の皇子四品彈正尹阿保親王の第五子にして正三位中納言在原行平の異母弟なり母は桓武天皇の第八女伊登内親王とす其系統頗る貴く皇胤を距ること遠からずされども父祖の故を以て身高からず天長中阿保親王の奏請を以て兄行平朝臣と共に姓を賜りて在原と稱し人臣に列せらるゝに至りぬ嘉祥三年正月年二十五歳にして從五位下に叙せられ貞觀四年三月從五位上に進み同五年三月左兵衛權佐より左兵衛權少將となる同七年三月右馬頭に任せられ同十一年正月正五位下に進む後累加して從四位下となり元慶元年右近衛權中將となり翌年相摸權守を兼ね同三年藏人頭となり同四年美濃權守に任せられ同五月二十八日に卒す年五十六歳なりしといふ

朝臣の經歷官叙として正史に散見するもの凡そ此の如くにして少しも其詳細は知るに由なきなり然も其正史と雖所々に咀嚼せる所ありて其官位の順序も頗る不明なりとす三代實錄には朝臣の人物を評して體貌閑麗放縱不拘略無才學善作和歌とあり（大日本史には三代實錄を引用して略無才學の四字を省けり一説には無は有の誤ならんといへり或は然らん業平果して無才無學の人なりしならんか大日本史の此一句を削りしも亦故ある所なるべし）又同貞觀十四年五月十七日の條に勅遣正五位下

右馬頭在原朝臣業平向鴻 館勞間渤海客是日客徒賜宴と見ゆ其他文德實錄にも所見なしされば是等の正史と稱せらるゝものに於ては業平の一生は到底詳細知るに由なきなり漸く伊勢物語の一篇は殘餘の經歷の解釋し得べきものを現せる所なり

之を伊勢物語に徴するに朝臣が一生は放縱恣にして躬行修まらず花月にあこがれ酒色に溺れ其の浮名は長く後の世まで歌はれ遊逸放蕩の艶冶郎といへば必ず先づ指を業平に屈する所なり殊に二條后藤原高子に通じ遂に之を誘拐し去らんとして事破れ却て高子の兄國經基經の爲に髪を斷たれ遂に關東に下り嶮を攀ぢ岨を踏み蔓蘿地を埋むる山路波濤岸を打つの浦和に流離し幾多の佳作を膺し歸りたる事或は伊勢に狩の使として行き齋宮と通じたる事などは其最も著しき事跡として夙に人口に膾炙せる所なり朝臣の和歌に巧妙なるは今更に取出でゝいふべくもなく三代實錄すら善和歌といひ業平に限り特書を見るなり紀貫之は古今の集に心あまうて詞足らずと評し大日本史も特に東下りの歌を特に引用して稱賛せるを見るなり古今集の二十七首皆一として佳作ならざるはなし惟喬親王に臣事せしは其忠實を示し渤海勞問の一條は朝臣の才學を徴し三代實錄の略無才學の一句を打破すべく大鏡の所謂宇多帝と相摸をなしたる事又は其官の武官にて後世にも在五中將と稱せしを以てせば武事武藝にも心ありし人なるべし要する業平一生の事跡經歷は確實なる記録もなく傳記もあらざれば此等の外は容易に知るべからざるなり後の人賀茂の岩本に祠を建てゝ之を祀る子二人あり棟梁滋春といふ共に和歌に巧にして古今集にも見えず殊に滋春は大和物語の作者として名あり

## 二、業平の性行

業平の經歷は既に説きたるが如く實に業平は平安朝の初に於ける一種の怪物なり此怪物を論するに

は聊先づ當時の時代は如何なる時代なりや其時代を歴史上より觀察しれど、の要あるを見るなり  
前にも述べし如く平安朝四百餘年の間は驕奢浮華の時代なり優柔懦弱の時代なり蓋し夫の推古天皇  
の時より始まりし隋唐との交通と佛教の弘布とは奈良朝の頃より愈々我が邦の文明に影響を與へ唐  
風の摸倣は我が質朴粗野の風を打破えて華美婉麗の風とならむ佛敎の益隆盛に趣きしは勇壯活潑  
の風を捨て、優柔懦弱の風と化せしめ奈良朝に於て既に其萌芽を現はせしも平安遷都以來は益其風  
を盛にし浮華を弄び無常を感じ高貴なる人は更なり賢明なる人物も皆其風潮に従て互に豪華を競ひ  
奢侈を圖はる男女兩性の間には嚴正なる規則は更になく傲奢淫靡の四字は實に此時代を代表したる  
適當の語たりやなり加之藤原氏が大權を掌握するに至りてより此風は益甚しく朝廷の顯要なる職は  
皆此一族の占有する所に在て外には全國の土地の豐饒なる大部分を領し内には天皇の外戚となりて  
政權を掌握し而して其實務は之を卑官に委して已は唯名のみ有して専ら宏壯なる邸宅の中に長夜の  
飲をなし花鳥の使を馳せて情を通じ春日の暮るゝをも知らず秋夜の闌くるをも覺えず淫猥なる娛樂  
にのみ耽り人民の苦をも察せず時には壯大なる土工を起してひたすら已の生涯を驕奢に費し子孫の  
繁榮を希ふ外あらざりしなり

朝廷顯要の地位を占め國家の政務を委ねられたる者にして既に此の如くなれば政令は日に廢弛し權  
勢ある智謀ある士は其間に獨り利己の畫策を廻したり此時に當りて上皇室には桓武、平城、嵯峨、淳  
和、仁明の諸帝を経て文德帝の御代となれり天皇は仁明天皇の太子にして母は左大臣冬嗣の女五條  
后といふ帝四子あり長は惟喬親王帝即位の時七歳なり次は惟彥二人共に紀名虎の女靜子の腹なり第  
三は惟彥といふ滋野貞主の女の生む所なり第四は惟仁親王といふ帝即位の後五日にして生る母は右

大臣藤原良房(冬嗣の二男にて文徳帝の外舅たり)の女明子染殿后といふ帝即位の十一月にきて惟仁親王を立てゝ太子となし給ふ然れども帝の御志は惟喬親王の既に長じ玉ひしを以て兄弟相及ばすの古習により皇太子を廢して先づ惟喬を以て太子とし次で惟仁に及ばしめんと欲し玉へり然るに良房を憚りて未だ發し玉はざりきされども文徳帝は惟喬の爲に祈らしめ玉へり良房亦惟仁の爲に祈りたり江談にもいへり『帝有讓位於惟喬之志憚良房不果成祈神又修秘法眞濟爲惟喬祈焉眞稚爲惟仁祈焉』といひ朝廷にも兩黨相分れ互に神佛に祈禱して其志を遂げんとせり藤原良房相源信の如き人物ありて陰謀を畫策し各なす所ありしか如し而して良房の權力は獨高く太政大臣に上りて上下を壓倒して獨り世を睥睨する有様なりかゝる合力ある事なれば遂に天皇を初め反對黨は志を得ずえて惟喬親王に元服を加へ四品を授けられしにもかゝはらず天永三年俄然文徳帝の崩御となり惟仁時に僅に九歲惟喬十五歲惟仁立て即位す之を清和帝となす童謠あり曰く『大枝於超天奔超天騰加利躍土利超天我耶護毛留田仁耶搜何佐留食母志岐耶雌雄伊志岐耶』とかゝる幼冲の君主は實に我邦未曾有の事なりき是より良房は外祖父として其權勢は一層強大となり遂に太政大臣として萬機を攝政し大權悉く良房一身に歸したり其閑居の後も位は三后に准せられ年官年爵を賜ひ隨身兵仗を附せらるに至りたり之に反して惟喬親王はいかに快々として樂まず山崎の傍小野里に最詫しき月日を送り近江甲賀山中に隠れ或は小野の山中に入り遂に剃髮し給ひ吟詠以て鬱を散じ玉ひしといふ

嗟此時期は實に我國史上の大勢變動せし境界なり古來史家は此時期を以て甚緊要なる局所とし大鏡は文徳帝に筆を起し白石の讀史餘論亦然り蓋し幼主の冊立は大權全く藤氏に歸し大權再び朝廷に歸するの日を見るに至らざりしを以てなり而して業平は實に此至難の際に生れ此至難の局に當らんと

せし人なり業平此地位に於ていかに其身を處せしや放縱自恣酒色に惑溺し或は徒に婦人を姦し或は漫然として遠く東國に旅行したり其行爲頗る奇にして殆ど端倪すべからざるものあり世人之を評して淫靡放蕩の柔弱男子となし或は世に納れられず時を得ざりしを怨み強てかゝる行爲を以て世を韜晦せし傑丈夫なりとす今其兩者の執る所を擧げて其是非を論せんとす

業平の性行を論ずるには先づ其最も近親して此物語にも屢現はるゝ紀氏との關係を述べざるべからず業平の妻は紀名虎の孫にして有常の女なり而して惟喬親王の母は名虎の女にして實に業平の妻の叔母に當るなりされば業平と惟喬親王とは頗る近親の關係あるなり而して今や惟喬親王は其儲位より廢せられ主上の思召よりも道理の上よりも其位に立つべきを藤原氏の爲に此有様となる心ある者誰か之を憤慨せざらんや業平亦一个の有情男子なり焉ぞ袖手傍觀之を他事する事あらんや況んや業平は藤原氏とは何等の關係なく王室の近親なるに於てをや然れども藤原氏の權勢は業平の敵する能はず然も其体貌の閑雅と時世の風潮とは不幸にして業平を弱點に導かしめたるなり

抑藤氏の朝廷に權を得四門共に榮え權勢並びなきに至るは其女子後室に納れて外戚となり已は外舅とぞて其權威を專にするなり良房基經亦此點に注目せしなり藤氏の永く平安朝に繁榮せしは實に其源此所に存するにあらずんばあるべからず清和帝の即位せらるゝや又帝に配し奉るべき女子を同族中に求めたり時に基經の女は未だ生れず配し奉るべき年齒の女子甚少なかりき唯長良の女高子と良相の女多美子とあり之のみ殊に高子は基經の同母妹なれば年齒少き長せるも必ず擧げて入内せしめんとす計畫をなし特に五條后の許に置きて清和の生長を待ちしものならむ業平此事情を知りしかば高子にして若し入内せば藤原氏は益々其權を奮ひ其跋扈一層甚しきものあらんと依て竊に花鳥の

使を高子に馳せ遂に情を通ずるに至りたり兄基經國經の兩卿は此事を聞き大に驚きかゝる事ありては入内の妨なるべしと五條后と計りて其通路を絶ちたり伊勢物語文中に所謂『世のきこえありければせうとたちのまもらせたまひけるとぞ』といふありかゝる事のあるにあらざれば何ぞ當時の有様としてかくも嚴重に高子を保護する事あらんや加之業平時既に三十四歳高子に長ずること十七歳業平素より放縱不拘なりとてかくも年齢の相違せる者に通ずる事あらんや其『本意にはあらで』の一句は能く其當初の事情を知るに足らん然れども業平の弱點は此所に存するなり業平には確固たる精神なし其逢瀬の重るに従ひて戀々として其要旨を忘るゝありしものならん業平は又思へり其一旦通路を斷絶せられ徒に防護の嚴重なる所に女を置かんより之を盜み匿さんには如かず殊に之を隱匿すれば藤氏は掌中の玉を失ひたるものなれば其野心宿望も自ら已まんと遂に之を盜み出で暗夜に乗じて攝州芥川(都を去る四五里あり)まで伴ひ來りしに雷雨は業平を去て猶遠く率うる能はしめざりき此間に國經基經兩卿は美玉を失ひたるに驚愕措く能はず蒼皇之を追跡して遂に之を捕へたり此の如くにして業平の行は藤氏の憎む所となり藤氏遂に議して業平を斬髮の刑に處す(古事談に『業平朝臣盜二條后宮任將去之間兄弟達昭宣追至奪返之時切業平之本鳥云々仍生髮之程稱見歌枕發向關東見伊勢物語と見え無名抄にも此事見えたり)業平是に於て東國に歌枕を尋ねんとし到底已が志の行ふべからざるを知り『身をやうなきものに思ひなして』といひて遂に東行を企て信濃より三河に入り駿河を経て武藏に入る此間幾許の月日を費しゝやを明にせざるも蓋々非常の長日月なりしなるべし山に登り川を渡り辛酸を嘗て此長途旅行をなす唯歌枕を見るのみに於て何ぞ關西の優美なる風景を捨てかく蒼莽なる東國を卜またるぞ蓋し其間に何等の消息なしといふべけんや一説に曰く東國下りは又一に有

志糾合の策なるなからんやと或は夫れ然らん然れども業平の深意果してかゝる所にありしや其結果の確かならず記事中一片の詞さへ漏らえたるを見ざればさる深意もなかりきものゝ如きなりされば唯絶望の餘かゝる邊境を撰みて漫然此行を企てきものにあらざるか或はかくも長途旅行を企てしを以てせば他に深き意の潛伏せしにあらざるか

業平の京都を去りてより藤原氏は外聞を憚りて大に苦みしも遂に謀を以て高子を入内せしめしが如し高子入内して陽成帝を生み奉りたり業平亦歸洛して大原野に高子に會せり『大原や小鹽の松もけふことは神世のことを思ひ出づらめ』の一首は業平の悔恨充滿し遺憾悲憤の情は裏面に含み反意を以て藤氏を褒えたる狀顯然たるなり『心にもかなしと思ひけんいかゞ思ひけん知らずかし』は此歌と共に業平の絶望を推測したる言なり其失意はいかばかりなしか初の計策は水泡に歸せ戀人は到底得べからざる雲上に入りたればなり嗚呼業平の二條后に於ける一條且は東下りの一條は古來諸説紛々として殆ど抵止する所なき事なるが要するに以上述べたるが如き深意は確に業平の心中に形成せられたるものなるべし然れども其手段の巧妙ならざると其權勢の少なかりしと事に當りて龍頭蛇尾なるとは遂に其本色を現はし好果を得ずきて其計策悉く水泡に歸したるは偏に業平の弱點による所にして業平の爲に惜みても猶餘あるなり

歸洛の業平は再び用ゐられたり蓋え業平は高子既に女御に上り愈々失望の度を高め到底藤氏には敵すべからざるものと思考して敢て之に敵せんとは企てざりしを以てならん然れども藤原氏の專横は殊に甚しく惟喬親王は小野の山里に蟄居し玉ひて敢て顧みず業平は年四十に餘りて官は僅に右馬權頭に過ぎず近親なる紀氏は退轉して此物語にも『昔紀有常といふ人ありけりみ代の帝に仕奉りて時

に逢ひけれども後には世替り時移りければ常の人のことあらす』といふ有様となり又大鏡にも『藤氏が榮ふる程に紀氏はかれんとて悲める』とあり業平は常に紀氏と共に惟喬親王に伺候し花の朝月の夕絶えず侍りて親王を慰藉し奉り或は交野の櫻或は鷹野の狩に従ひてひたすら誠意誠實を以て仕へ奉り

世の中に絶て櫻のなかりせば人の心はのどけからまし

ちればこそいとし櫻もめでたけれうき世になにか久しかるべき

の歌の如き皆親王に同情を表し奉り悲哀の情を隱微の中に含まざるはなきなり殊に小野里に雪中の慰問は殊に感慨深く業平の親王をいかに思ひ奉りまかを知るに足らん此物語に於て此一段は殊に文章巧妙を極め後見る者もそいろに親王の爲め業平の爲に涙を流さざらんや

枕とて草引ひすぶこともせし秋の夜とだにたのまれなくに

わすれては夢かどれふもおもひさや雪ふみわけて君を見んとは

『たのまれなくに』夢かと思ふ』の一語は能く業平の精神を寫玄得たりといふべし新古今集に此後の歌の返しなりとて親王の歌あり

夢かとも何か思はんうき世をばそむかざりけんはどぞ悔しき

と詠し給ひ又

白雲のたえずたなびく峰にだに住めばすみぬる世にこそありけれ

何等の慘憺ぞ親王の情實に察するに餘りありといふべし御身は高く九五の位を踏み給ふべき地位にありながらかゝる僻地茅屋に身を潜めらるゝ御心の程やいかなりけん



藤氏の專横亦甚しといふべし親王遂に剃髪し給ひ業平此時の心中亦いかなりしか切齒扼腕慷慨悲憤  
藤氏を倒さんの精神は心裡に勃々たりしものあらん然れども時の不遇と其弱點とは遂に業平をして  
奮起せしむる能はざりまなり契沖も賛していへり

花よりも余りて匂ふ梅か香の深き心ぞ遠く残れる

芳州なる人は

萬代のあとに消えぬは小野山の雪ふみわけしまことなりけり

治堅なる人は

みかりせば交野の春にひさかへてかなしき雪のあとをみる哉

と皆業平の誠實を賛せしに外ならざるなり

要するに業平の一生は常に王室の式微藤原氏の專横を奮慨し藤氏を倒して惟喬親王を儲位に即け奉  
らんと欲せしも世は遂に業平を容れざりしなり文徳天皇すら藤原氏の權勢を憚り玉ひまに焉ど業平  
の如き一人の力にて何事をか成し得ん事の成らざりしは憂憤の情を引起し遂には一身の名譽をも犧  
牲として身を放逸懶惰に流れしめ全く世を韜晦して一種の怪物となりたるなり實に二條后の事とい  
ひ東國下りといひ皆爰に基せずんばあるべからざるなり其不平の極は嘗て

おもふ事いはず唯に止みぬべき我と等しき人しなれば

と詠せしむ其胸中の畫策成らんとして成らず不平憂憤の極は蓋し此詠となりしものならんか然れど  
も其淫逸放蕩の甚しきは假令憂憤の餘一世を翫弄し去りたるものとはいへ當時の時世の然らめめた  
るといへ全く風潮の奴隸となり其深淵に墮落せしは其弱點に基因するものにして此等は殆ど吾人を

して辨せしめんと欲するも亦能はざるなり伊勢齋宮の事件等に至りては實にいふに忍びざるなり當時の時世既に然りしといへ亦實に甚しきものといふべし今業平をして此弱點を除き確固たる精神を以て其志を貫徹し得せしめば時世の不遇なりとも官位の卑官なるともかゝる尊貴の血系を有せる者にして亦一世を驚き藤氏を苦ましたる此大畫策の一部たりとも行はれたる事なからんや然るに業平は徒に其弱點に従ひかゝる醜猥なる手段を以て世を韜晦し去らんとせしは實に業平の爲に惜むべきの至りなり服部南郭は嘗て論じて曰く

夫在五中將者、詠達哉、其文也、不假雕琢而巧爲微辭、乃託古昔鄙事自述、諧語自出、割名嚙腕、蓋亦穢德玩世之徒、豈引繩墨而論哉(中略)至如其好色牀第不修世因疾焉、然觀其世宣淫是競、一時貴遊子弟乘境垣望復關者、握手無罰、目貽不禁、則習尚之使然也、乃病其風俗乎可也、奚獨責在中將爲淫首哉、昔司馬相如、自作傳叙其臨邛之奔、且文辭靡麗不爲行藏、古之人乎、亦不足怪已、後世刻剝之流好揚惡德、令古人無所容足、則莫取諸風雅也、和歌者流、家傳々誦、而不問其人可謂厚矣(中略)夫小野王矢志自匿也、紀氏雖微亦傲世不改其樂也乃在中將之周旋其際、締交款曲、終始如一、豈不偉哉云々

是れ大略業平の性質を能く看破きたる見と見るべきなりされば余は一に業平を貶する者にあらずされども又徒に之を追慕するにもあらず其晚年勃海客を勞問せしが如きは業平の素行も漸く修まりし時にて此等の道にも其心ありしを知るべく『世の中にさらぬ別もなくがな』の歌は業平の孝心を察すべく『これやこの天の羽衣うべしこそ』の歌は親族にも親しかりしを知らるゝなり殊に其和歌に至りては絶貫之も大に之を賞賛し短扁なる土佐日記にさへ二三ヶ所も見え業平を追慕せられし狀見らるゝなり本居内禮も『人磨亦人に美をつぐ』と賞せられ其辞の徒に追琢をからずして其意の深遠なる

は鬼神も爲に泣き人をして慟哭せしむる如きの詠少なからざるなり  
然れども其淫逸放蕩に過ぐの一語は到底業平の身を去らしむる能はず世人の徒に辯護えて盡誠憂國  
の一忠臣となすには直に賛同し難き所なりとす

伊雄なる人はいへり

雪わけし心のあどは埋れてきえぬものはあだなりけり

## 五、伊勢物語に現れたる此時代の思想及風俗

文學は人心の反映なり社會裏面の歴史なり文學は以て當時の人心の思想の那邊にありしや當時の人  
物は如何なる風俗を有せざるを知るに足るものなり此等は到底正史に於て研究せんと欲するも能は  
ざる所なり蓋し作者が其時代の事實を網羅し其思想風俗を綜合して已の想像を構へ他の感情に訴へ  
んとして以て之を形成する傾向あればなりされば文學は常に外界の事情に左右せられ國運地勢氣候  
山水の風景の如き凡て吾人の周邊にある事々物々は皆文學に大影響を及ぼし國亂れては勇壯なる  
慷慨の文字となり國治りては優美なる卑猥の文字となるテインはいへり文學史を編して其國の心理  
學を研究すと實に此の如く文學と人心との間に密接の關係を保有せるは蓋し明なりといふべし風俗  
は又其思想より起る所なり思想の簡單なる時代に於ては風俗從て單純に思想複雑となれば風俗の從  
て錯雜せるを見る是等は決して偶然の事にあらずして皆かゝる傾向を有せるものなればなり然らば  
則ち其文學上に現はれたる思想及風俗は即ち其時代の風俗及び思想にして即ち社會裏面の歴史とな  
るなり此の如く文學と思想及風俗とは密接の關係を有せるものなれば文學を論ずる者亦其文學に現  
れたる思想及風俗の狀態に付て論せずして已むべけんや

試に吾人伊勢物語一卷を繙き通讀一過せよ直に當時の人民は如何なる生活をなせしや如何なる理想を懷きしやは吾人の眼に簇々として影寫し來るにあらずや前にも屢々論せし如く平安朝四百余年の間は浮薄放逸の時代にして人心浮華に流れ花鳥に詠じ風月を吟じ遊戲三昧に耽りて風俗一般に淫靡放縱殆んどいふに忍びざる有様なりしなり從て此間に起りたる事態は悉く戀愛の事に關せざるはなく加之佛教の益々隆盛なるに従ひて因果應報の理を悟り佛説に感溺て佛の怪生の靈などの類を恐れ加持祈禱の如き迷信は普く一般に流行し道德紊亂し權貴に媚び卑賤に傲る風は愈々盛となり孝悌忠信の道は地を掃て去るに至りたり雲上に住める殿上人上達部の如き官人は財用乏しからざると官職の尊貴なるよりして徒に人民を驅りて宏壯美麗の邸宅を構へ盛大なる宴會を催し身には綾羅錦繡を纏ひ口には豪梁美味に飽き家什の用具にも象箸玉杯は更なり輿車には金銀を鏤め別墅には朱玉を布き庭園の結構も山を築き水を走らせ曲水宴紅葉賀五節宴など唯雅遊にのみ耽り川には龍頭鬚首を浮べ詩歌管絃の巧を爭ひ山には花月の宴を開きて酒池肉林の光景を現出す圍碁双六蹴鞠放鷹の類は更なり騎射競馬の如きも甚盛なりしなり然れども一たび都を出て遠く東西に離ては路に輿なく車なく堂々たる往還も松杉森々として雜草路を埋め田畑を耕す者も少なく盜賊も横行する如き有様なりき又之と共に此時代に於て人民はいかなる方便を以て男女戀愛の想を通せしや迷信の度はいかに甚しかりしや人情道德はいかに地に落ちしやいかなる衣食住を採用せしや服飾は如何冠婚葬祭は如何歌舞嬉戲の類は如何地方交通の有様は如何なりしやを研究するに於ては一には歴史を補ひ一には其時代に於る思想の那邊にありしやを知るに足らん而して此伊勢物語は又所々に其消息を漏せるにあらずや

戀愛は此物語の殆んど全部を占めたる思想なり此時代に於ては貞女が二夫に見えずといふ訓を固守する者更になく女子數回改嫁するも人敢て怪まず男子は素より一層甚しく此里に妻を設け彼の地に他の女と通す實に輕薄なる戀愛は全く一夜妻たるに過ぎざるなり此物語は殊に此事實を代表するものともいふべきなり此物語上に現はれたる業平の如きは到る處に其地の女と契りしにあらずやむかしみちの國にてなでふことなき人のむすめに通ひけるにあやしうさやうにてあるべき女にはあらず見えければ

まのふ山まのびてかよふ道もがな人のこゝろのれくも見るべく

女かぎりなくめでたしと思へどさるさがなきゆびす所にていかゞはせん

其輕薄なる愛推して知るべく實に今日の妻も心に合はざれば翌日は一片の音信だにせず

むかし男宮のうちにて、あるごたちの局の前をわたるに何のあたにか思ひけんよしや草葉のならんさが見んといひければ男

つみもなき人をうけへばわすれ草己がうへにぞれふといふなる

といふをねたう女もれもひけり

嫉妬の情は明に見ゆるなり輕薄なる戀はかゝる嫉妬を生じて互に相爭ふに至るものなり『女の許に一夜行きて亦もいかず』などいふ文字は所々に現はれ皆實に全く圓滿なる愛情にあらざるなり唯嬌慾を恣にする結果に外ならざるなり實に當時の男女兩性間は德義全く地に落ちて夫妻の倫理は地を掃て去り淫猥醜陋厭ふに堪へたるなり此の如き例は伊勢物語を通觀すれば決して是等一二にして止まらず甚多さを見るなり

此の如くにゑて男女相互の情を通ずるには必ず和歌を贈答して若き男は一身を唯戀愛の犠牲に供し親を捨て子を放ち公私の事を欠ぐともよき女ありと聞き或は一見すれば詳細に其美醜をも究めず直に之に歌を贈りて情を通ず唯戀てふ名を晴として多くの女子を従はしむるにあり此物語百有餘段殆ど此等贈答の歌ならざるなきは皆其方便とせしを以てなり其一見直に戀慕し何は扱置き歌を贈る様は

其里にいとなまめきたる女はらからすみけりかの男かいまみてけり、おぼえずふるさどにいとものはしたなくありければこゝろまどひにけり、男きたりけるかりぎぬのすそをさりて歌をかきてやる……

見ずもあらずみもせぬ人のこひしくはあやなくけふやながめくらさん

いにしへはありもやしけんいまぞしるまだ見ぬ人をこふるものとは

の如きは何ぞ痴情の甚しき殊の後の歌の見ずもあらず見もせぬ人を戀ふ如きは殆ど吾人をして呆然として其陋態に驚かしむる所なり従て姦淫の風大に行はれ或は他人の妻に通じ甚しきは妹を見てさへ心を動せるにあらずや

むかし男いもうどのをかしげなるが琴ひさけるを見をりて

うらわかみねよげに見ゆる若草を人のむすばんことをしぞ思ふ

かへし

初草のなごめづらまきことのはどうらなくものをおもひけるかな

此一段に付ては諸説紛々たるが亦以て當時の風俗道德のいかに衰へしかを知るに足らん業平の如き

は神聖にまで侵すべからざる伊勢齋宮に通じたるにあらすや

此の如くにして當時の風俗は浮華淫靡の最極點に達したりしなり此等の人々の目には更に武家時代に生じたる嚴重なる男女の別の如きは夢想だにせざる所なり和歌を贈答して相思の情を述べ狹隘なる情の天地に踟躕しつゝありたるなり然れども又眞面目の愛情なきに非ずされば絶望の戀果敢なき戀遂げぬ戀などいふものも所々に散見せるを見るなり或は男が變心を怒りて遂に死を遂げたる女性あり

あひ思はでかれぬる人をといめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる

と詠せり戀人を失ひ戀々たる情紛々として至り舊屋の荒れ果て今昔の感に堪へずして

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

と詠じたり此の如くにして此時代的情愛は唯男子は女子の心を得ん事を勉め女子は男子に思はれん事を勉め天真にして修飾なりき相思の情と淫靡極りなき情とは此時代の人民の理想として存在せし所なりとす

感情の中に執迷は潜めり狹隘なる情の天地の暗き半面には奇怪なる想像は潜伏せり佛教の發達と陰陽道の流行は一層迷信を深くせしめ恐ろしきものといへば之を鬼に喩へ或は魂結などいふ事さへ信ぜざるが如し或は其遂げ難き戀情を止めんとしては之を佛神に祈り陰陽師神筮の類を以て扱はしめて其心を制せしめんとす其愚なる迷信の甚しき然も戀情にまで伴はしめたるなどは以ていかなる度まで迷信が發達せざるを知るに足らん

かくかたはにしつゝありたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひにはるびぬべえとて、こ

の男、いかにせん、わがかる心やめたまへと佛神にも申しければ、いやまざりにのみおぼえつゝ、なほわりなく、こひまうのみおぼえければ、おんやうじ、かななぎよびて戀せじといふ、はらへ、のぐしてなんいきける

加之佛教の思想は既に此等人民の腦裡に徹底し爰に迷信を生じ從て無常の念起り或は絶望の戀に世を倦みはかなみ尼となりて山間に隠れたる者もあり

あてなる女の尼になりて世の中をおもひうむじて京にもあらずはるかなる山里にすみけるもとにとしぞくなりければよみてやりける

そむくとて雲にはのらぬものなれど世のうき事ぞよそになるてふ

『雲にはのらぬ』などゝの思想は全く宗教思想より來りしものなり實に佛教は此時既に此等の人民の腦底に徹せられ居りしものゝ如く思はるゝなり奈良朝末より平安朝終に至るまで人間の氣力は更になく精氣に乏しかりしは實に此佛教が其思想中に徹底して迷信の度を愈々深からえめたるに依らずんばあるべからず

又此物語は當時交通の一片をも窺ひ得るなり業平朝臣東下りの一段は駿相の山道のいかに嶮岨にして開墾の行届かざりし有様を見るべきなり

うつゝの山にいたりて、わが入らんとする道はとくうらはそきにつたかづらしげりてもの心細くす  
いろなる目を見ることゝ思ふに

又衣食住はいかゞなりしや『かれいひ』といひ『ひじき』『みる』の如き食物見ゆるはかゝる物も又食用となせし一班を見らるゝなり『狩衣』『唐衣』『ながき髪をさぬの袋に入れて』『遠山すりの長さあをゝ



ぞきたりける『つくも髪』など衣服風習を知るに足る『築地の垣』『水走らせ』『石をすら』などは其家宅庭園の構造を知るを得べし又冠婚葬祭の事實とまては開卷第一『初かぶり』の事あり崇子の葬可幾子の佛事など見えたり又四十賀八十の賀などは盛に行ひしものゝ如く所々に散見せり朝廷の公事としては宇佐の使、狩の使、しる所など以て一班を知るに足るべし實に此等は平安朝の初期に於ける有様を見んとするには有數の材料たるなり

要するに伊勢物語に現はれたる此時代の思想は極めて簡單なり唯情愛の天地に沈溺して更に他を顧みず造次顛沛の間にも男は女を思ひ女は男を慕ふ戀愛の極は徳義をも忘れて醜猥卑陋となるに至りたり吾人は實に萬葉に於けるが如き高尚なる思想は到底此書に於ても發見する能はざるなり此時代の人間は人生といひ運命といふ如き眞面目なる高尚なる問題は顧るを欲せず唯花に吟じ月を詠じ自然の美を友とし戀愛を以て唯一の理想とし優美風雅の間に生涯を送りたるなり彼は月下血に泣く杜鵑の如く此は花に戯る蝴蝶の如き其思想夫れ此の如き風俗は從て思想を代表し萬葉時代の素樸の風は更になく優柔淫靡の風のみ認めらるゝに至りたりされば此物語は以て能く此時代の社會を代表し社會の混乱徳義の紊亂の一斑を知るに足るべきなり是れ一般皮想の見のみ猶裏面に幾多の隱微の事實をも含めるならんか

#### 六、伊勢物語の文學上及び歷史上の價值

伊勢物語百二十餘段悉く男女贈答の歌を骨子として一篇の文を爲せるものにして皆一个の零碎斷片の話說にして小説にもあらず史傳記にもあらず其間在原業平の事蹟を記載して或は淫夫となりて現はれ或は忠臣となりて出で殆ど端倪すべからざるものありされども熟讀精閲して自ら其間に脈絡の

通ずる所事實の聯關せる所あるを覺ゆなり而して其文章は簡潔にまて適強詠歌は深意にして古調を帶び頗る詞葉のめでたきものあるなり然れども其記事悉く淫猥にして心ある者は皆之を爪はじぎする所なり定家卿も『強不可尋其作者只可玩詞花言葉而已』といへりされども當時の時世なれば此等の事敢て怪むに足らず蓋しかゝる類にあらざれば以て當時一般の人に愛讀せられざりしものならんされば其美文上より觀察して其事實を捨て其價值あることは以て知るべきなり日本文學史も『余輩は平安朝の文學に於て多くは其文章を取りて其記事を取らず或は其文と其記事を取るも其人を斥くること少なからず此書に於ても亦しかいはざるべからず』と是然り美文を求めんと欲せば宜しく此覺悟なからざるべからざるなり

然れども頃者業平を論じ此物語に及ぶ者此物語を以て歴史上裏面の事實を包含せるものなりとし以て藤原氏を傷けんとして深く自ら韜晦せる偉丈夫なりと贊する者多きに至れり果して然らば此物語は歴史上大なる價值を有せるものと稱すべき點あるなり殊に此時代の記事に於ては三代實錄六國史ありて漸く其消息を吾人に傳ふるも是れもと藤氏の筆になりたるものなれば正史なりと稱するも何ぞ我田引水の記事なきを保すべけんやされば歴史上の價值も共に論ずるの要あるを見るなり

### 一、文學としての伊勢物語

伊勢物語は文學上いかなる價值を有するか既に前にも述べし如く此書は眞なる物語の体をなさずして日記の如く紀行の如く實に序の長さ歌集の如き觀あるなり文辭といひ詠歌といひ頗る巧妙にして殊に文辭は極めて艷麗にして軫弱ならず簡勁にして適強詞少くして意滿ち常に短句を用ひて語尾を截斷しセンテンスの甚短さを覺ゆ或は天爾遠波を省て餘情を含めたるなどは頗る古雅の体となす實

に奈良朝の散文の句々層々相重り朴訥古雅なる文体と平安朝の末長句法を用て文章の流暢となりたる体との間にありて其變遷時代の文体たるを疑はざるなりエマルソンの辞章の簡潔なる支那經典の文章の簡勁なるも或は此物語の簡古なるには及ばざるものあらん殊に各段の冒頭『昔男ありけり』既に何等の簡單にして適強なるぞしかも好んで其結尾を斷截するは此書の特徴と思はるゝなり

さこそいへまだおびやらず。人の子なれば心の勢なくてえとめず。女もいやしければすまう力なし。さる間に思はいやまさりにまさる。

むかし男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。いは木にしあらねば心ぐるしどや思ひけん。やうくあはれ思ひけり。

その比六月のもちばかりなり。女身にかさ一つ二つ出でたりければいひてせたる。今は何の心もなし。身にかさ一つ二つ出できにけり。時もいとあつし。すこゑ秋風吹きたちなん時かならずあはんどいへり。

なほいかに語尾を好んで截斷えいかに好んでてにをはを省きたる殊に名詞より動詞に續く』に『も』の如きは甚だ省略せるを見るなり又語を省きたる例には

昔男宮のうちにて、あるごたちのつばねのまへをわたるに、何のあだにかおもひけんよしや草葉のならんさが見んといひたれば

昔男女みそかにかたらうわざもせざりければいづくなりけんあやしさによめる

の如きは語を徒に省き頗る簡古にして實に解するに苦み古來諸説定まらざる所とす而して此物語の思慕怨恨の情を描寫したる所は筆頗る巧緻婉麗にきて轉々として球を盤上に轉するが如く神に入り

て殆ど其狀を眼前に浮ぶが如き感あるなり

昔男ふして思ひおきて思ひおもひあまりて

僅々二十余言なれども其思慕の情は能く此語句中に躍出せるにあらずや殊に此物語の詠歌に至りては更に怨恨の情一層深幽なるものを見る然も業平の歌は貫之も評せし如く『其心あまりて言葉足らずまづめる花のいろなくて香残れるが如し』と實に其文章と共に詠歌も言葉足らずして意の頗る深遠なるものあるを見るなり

又年のむつきに梅の花さかりに、こぞを思ひ出で、かの西のたいにいきて、たちて見、ゐて見、みれどもこども似るべくもあらず、うちなきて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、こぞを戀ひてよめる、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

此歌は古今集にも入りて夙に人口に膾炙せる所なるが實に貫之が心餘りて意足らずとは斯の如きものにて少しも浮華の跡なくまかも餘韻嫋々たるを覺ゆるにあらずや實に文辭といひ詠歌といひ萬感轉々胸に湧き出で殆んど制し難く遂に打泣くに至る狀描寫して詞少く言足らず而して其足らざる所在意迫りて情の愈々禁じ難き所を見るは到底後世の作者の企て及ぶ所にあらざるなり

又東國下りの一段に於て參河國八橋にて杜若の咲けるを見て或人かきつばたの五字を句の初におきて旅情を咏せよといひければ業平直に

から衣きつふなれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ人皆落涙せりと實に和歌の妙は以て天地をも動し鬼神をも感せしむ況んや情にもろ

さ此人間に於てをや共に辛酸を嘗め來りし者誰かかゝる即席の巧妙を聞きて涙を落さる者あらん其措辞の巧なる然も其意の乾燥ならざる到底業平の如きせニアスを有せる者にあらざれば能ふべからざる所なり季吟は業平は天往其骨を得たる者なりといへり實に此等の頓才は業平の如きにあらざる得べからざる所なり

ゆきく／＼とするがの國に至りぬうつ山に至りてわが入らんとする道はいとくらくはとき焉羅はまがりてものこゝろばそくすゐるなるめを見ることとおもふにすぎやうざあひたり、かゝる道にはいかでおはするといふに見ればみし人なりけり京にその人のもとにとて文かきつく

うつゝなるうつ山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

一種の畫幅を見るが如く接續詞を省きて轉々として次句に續く所簡古にして餘意深く辞句の上に含蓄し宇津山道の峻嶮なる老樹森々として鬱蒼し蔓蘿延々として繁茂し路上を蔽ひ其心細き事を描出して頗る力ある老練の筆なりといふべし忽ち現れ來る一人の修業者所といひ人といひ時といひ何等の崇高にして奇想なる業平是に於てかかゝる道にはいかでおはすると問ふ圖らざりき業平のかゝる所にて人に遇はんとはしかもよく見れば知己の人なりと

愈々出でゝ愈々奇にまて奇想は天外より落ちんばかりなり實に業平の旅裝修行者の風采焉蘿草木相交れるの所は一種の繪畫を眼前に横へたるが如き有様あり武藏國隅田川に至る舟中より水鳥を見て名を問へば都鳥といふ業平即ち

名にしおはゞいざ言問はん都鳥我思ふ人はありやなしやと

と此歌傳へて絶唱となす舟中の人舉て泣けりと凡そ情あり涙ある者誰か同情を表して一片の紅涙を

注がざらん都を發してより爰に幾月日を経にけん其間信濃に入り三河に入り駿河を経て武藏に來る羈旅の辛酸夫れいかばかりぞや道に興なく車馬なく險を踏み阻を超え千山萬岳を跋渉し海川を渡渉し松柏鬱蒼の邊萬蘿草深き所に流離しえかも都下の貴公子にして心に滿腔の不平を懷きて放逸遊惰に身を委したる者なり其苦心慘憺困苦の程は吾人の想像も及ばざる所ならん然るに今や隅田川上一羽の小鳥の名ははしなくも業平の心を刺激せり都の一字は思ふ人を遠く殘して數百里の外に出て幾百日を経たりし業平の腦裡をいかに打撃せしぞ蓋しかゝる絶調の出でも決して偶然といふべからざるなり凡と業平の心情を知る者此歌を誦みて誰か一掬の涙を注がざらんや舟中の人皆泣きしも亦宜ならずや

而して此物語中殊に悲慘淒涼を極め他の諸段に卓絶して浮華なる戀愛にあらず慷慨誠意の文字となりしは小野山の一段にあり

むかしみなせにかよひ玉ひし惟喬のみこれいのかりしにおはしますどもに馬のかみなるおきなつかうまつれり日頃へて宮にかへりたまひけり御おくりしてどくいなんと思ふに大御酒たまひろくたまはんとてつかはさうりけり此の馬のかみこゝろもどながりて

枕とて草ひき結ぶ事もせじ秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける時はやよひのつどもりなりけりみこ大とのごもらであかしたまひけり

かくまつゝまうでつかうまつりけるを思ひの外に御くしおるさせ給ひて小野といふ所にすみ給ひけりむ月にをがみ奉らんとてまうでたるにひえの山の麓なれば雪いとたかしまいて御室にまうでをがみ奉るにつれゝといどものがなしくておはしましければやゝ久しくさむらひていにしへの

事なぞ思ひ出で、聞えさせけりさてさむらひてしがなとおもへどおほやけ事もありければえさむらはで夕ぐれにかへるとて

わすれては夢かと思ふ思ひさや雪ふみわけて君を見んとは

とてなんなくくきにける

此一段は既に前にも論せし如く業平朝臣をして通常の放縱不拘の徒と區別せらるゝ所なり其誠實の意を表またるは此巧緻の筆と共に長く傳ふべきなり

此悲愴なる一段はいかに古來學者の同情に訴へしぞ心ある者誰か涙を垂れずして此一段を讀まむ余嘗て太平記を讀み大塔宮の一段に至りては常に嗚咽噓唏禁する能はざるものありき然るに此一段は亦文簡にして文辭の流暢なる太平記の如くならざるも意は更に深く此段を讀みて親王の心情を推え奉り悲慘淒涼熱淚を袖に注がざるを得ざるなり細川幽齋公もいへり『所はひるの山のふもと雪の高く降りたるにそしたる御室に籠しおはしますさまはつれくきに哀なるべし大かたの人成とあるべきに此皇子風流なりま君の世をそむき玉ふ御心の中さぞ有なんよく工夫えて見るべき處なり』と又片岡近江守は堯孝法印が此處を讀みて必ず落淚するを見て之を泣かしめんとて態々此段をよみたりといふ岡松雲谷先生は嘗て司馬遷の史記の文にも比ふべしと稱せられまどぞ實に此一段殊に『つれくき』といふ物かなしくておはしければやゝ久しく侍ひて古の事なぞ思ひ出で聞えさせけり』の數句宛然眼前にある如く親王の物託しく住居給ふ有様業平憂憤誠實の情紙上に躍如たり

忘れては夢かと思ふ思ひさや雪ふみ分けて君を見んとは

實に業平の心中察するに餘あり辞短くして意長く唯直接に其狀を寫せるものなるも感慨の情紙上に

溢れ『夢かと思ふ』實に親王のかゝる御有様はの意含みて親王の爲心からの悲を述べたる様見ゆるなり

枕とて草引むすふ事もせし秋の夜とだに頼まれなくに

餘音嫋々親王が剃髪せさせ玉ふ前兆既に現はれたるを見て『頼まれなくに』と一言暗に前途を憂ひたる有様見え前後の文章と相對照して何等の慘憺ぞ其他伊勢物語を通讀するに玉詠佳什頗多く

おほかたは月をもめでしこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

天の月年月の月と忽にして轉ず語句の變化何等の靈妙ぞ

雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海邊にすみよしの濱

けふこずばあすは雪とどふりなまし消えずはありとも花と見ましや

千早ふる神代もさかず立田川からくれなるに水くいとほ

何等の優美幽艶ぞや業平の戀に對する心は唯切なりの語を以て止めんとす

思ふにもまのふ色とぞまけにけるあふにしあればさもあらばあれ

春やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

我が袖は草のいはりにあらねどもくるればつゆのやどりなりけり

かさくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとけこよひさだめよ

要するに伊勢物語の文學上の價值といふべきは其文辭の簡潔にして意の深き所にあり本居翁もいへり『誠に文章古雅して文法いと正しくあまたある物語の中にも此書にまさるものすくなかるべし』と加茂翁も『いにしへの文の体にて言少くて意をこめたる事かゝるものは又たぐひなしかつその歌



をあい照して心を催す事を學ぶべしこれをよく知りて末この物語のやうの文をとさうるにたやすし中にも源氏物語は此文を廣めたる所多し』と今思ふに源氏物語は實に其文のならず其人物に於ても藤壺の女御の源氏に於けるは此物語の大みやす所のいどころといふが在原なりける男といへる者との關係に於ける作物語に似たる所あり又其流罪の所は源氏物語須磨の一段に似たる所あるを見るなり然らば則ち源氏物語の趣向も中には此物語の中より胚胎せし所あるが如く見ゆるなり又東滿の言に『よく見ればげに此書の一言をあまたことにいひのべすべての趣もまかなうと思ひ得ること多ければそれら見んには本を知るたよりあり後の人はこの文の詞をよく見ぬにやさせる事なしと思へり源氏の詞は學ぶべし此詞はうつしどる事かたし源氏は後になれヌふみにて事をかきつくし且心詞どもに薄し伊勢はいにしへにつきたるものにて心詞こと少なくてあつきなり』といへり實に其文辞も源氏物語は婉曲緻密の文幽玄深遠にして内外の森羅萬象を描きて精細殘す所なく流暢なる筆は無限の趣味を帶び實に平安朝を代表する大文學なるは今更贅言を要せざる所なり然れども其婉曲流暢の筆は能く之を寫し載せて學ぶ事亦至難の業にあらざるも此物語の素樸にまて然も艷麗に言外に餘情を含むに於ては到底普通の筆を以て企て及ぶ所にあらざるなり伊勢物語は序の長き歌集なりと古人もいへり然るに平安朝の末に出でたる歌集の序は大井川行幸和歌の序の如く數百字一センチンスより成り流暢にして頗る華麗優美なるも長文は中途意索然たる憂多く且徒に華美に過ぎて實なく此物語の簡古にして明瞭に然も素朴の如くにして朴訥に過ぎざるには及ばざるなり此物語は實にかゝる筆を以て悲哀、戀愛、誹諷、慷慨、を寫し詞華の雅致あるは平安奈良兩朝の間に起りたる大文學として大なる價值を有せるものと認めざるを得ざるなり

## 二、歴史としての伊勢物語

伊勢物語は歴史上如何なる價值を有するや既に屢々論じたる如く此物語は虚實相半し中には作物語と思はる所は甚多く或は萬葉集の歌を引用して此に作者の理想より物語となりたらんと思はる所あり或は年代人物も大に咀嚼せる所ありされば一方に於ては歴史上少しも價值なき所あり然れども其業平の自記と思はるゝ諸段に於ては又歴史を補ふもの少なからざるなり殊に此時代の正史として現存せるものは唯六國史中文德實錄三代實錄の如き一二の書あるのみにて他は全く此等より採擷したるもの又は二三の斷片に過ぎざるものゝみなり而して此六國史も正史なりと稱するも是れ素と藤原氏の手に成りたるものにて殊に三代實錄の如きは菅原道真を陥せし當時の姦人時平の手になりしものなれば其自己に不得策の事件は亦曲筆せし所なしといふべけんや殊に其裏面に伏在せる藤氏の魂胆陰謀の如き類に於てはもとより更に當時の記録もなく又之を徴すべき書なし大鏡の類なきにあらずるも是又藤氏を憚りて事實を記する甚簡單たるを免れず然るに此物語の中に業平の日記よりの採擷とも思はるゝ東國下り又は惟喬親王の事などは古今集にも現はれ當時の事情より推考して確に實錄と思はるゝ所なり眞淵翁もいへり『東降の事は古今集に載せられたるも此物語と同じければさだかなる事實と知られたりもとより古今集はこの物語より取り載せられたるものなるべけれど業平のみまかられし元慶四年より古今集の成れる延喜五年までは僅に二十餘年なればもしあらぬ僻事なれば其時勅撰の古今集にそのまゝ載せらるべうもあらず』と以て實錄たらんといふ證とすべし又古事談にも業平が二條后を盜み髻を切られ東國に發向せし由記せりされば何くにか依る所ありしならんは明なりされば此等の事實は確實なりといふも過言にあらざるべし若し此事實を眞とすれば以

て正史を補ふ事少しとすべからず藤氏の專横紀氏の退轉加之業平の不平等は悉く此書中に現はれ基經の二條后に初ける魂胆惟喬親王鬱憤の狀の如きは歴々此書中に現はれ正史に脱せし所も此書に於て徴する事を得るなり世には此等の事を以て三代實錄、文德實錄、公卿補任の確なる國史に見えねば取るに足らぬ作り事と云ひたる者もあれどもそは國史に昵みすぎたる説にて余には國史に現はれざる事が却て此書に現れたるものと思はるゝなり萬葉集は混沌たる當時の歴史を補ひて大なる益ある如く此物語も亦此時代の正史を補ひて大に裨益する所あるや必せり

然らば則ち此物語は啻に詞花の婉麗なるより之を珍重すべきのみならず又其事實の上よりして取るべきもの少なからざるを知るべしされば此書を読まん者は其淫猥なる所は之を淫猥とし忠誠なる所は之を忠誠とし記事を精査し得て其文辭を咀嚼せば津々たる興味量るべからざるものあらん且は此疑を客るべき時代其記錄文書の存せざる時代を徴して一は業平の性行一斑をも見得べく或は當時の風俗思想の變遷を知るに於て國史を裨益する好材料とならん伊勢物語亦歴史上の價值は多少有せるものといふべきなり

## 七、伊勢物語の流布本及び註釋書

此書は詞華の雅致にして歌詠の幽玄なるは古來毀譽の聲定まらざりしと共に用ゐられ定家卿も歌學びする人に教へて古今集につぎてはこれを読みといはれたれば昔より此書を寫し傳も或は繪入となし又ハ註釋を施したるもの甚多く未だ見聞せざるもの少しとせず今世に傳はれりと流布する此書は凡そ左の如し

### 定家自筆本

武田本と稱す武田紹眞入道本にて逍遙院の處々に筆にて傍書したるを入道後に之を傳へたるものなるが一たび紛失し天正十六年に發見せられ細川幽齋公によりて傳へられたるものなり

定家卿校合本

天福本と稱す定家が天福年間に書寫校合して其孫に授けたるものなり

北村季吟の拾穗抄を此二書に依りしが如し

朱雀院塗籠本

山岡明阿所持本の寫にて末に伴俊明の奥書あり天福本に比して異なる所多しと云ふ藤井高尙は此書に依れり

同群書類従本

これ亦朱雀院の塗籠の中に納まりしものなれども前者と少しく異なり其傳ふる所も異なるが如し

眞字伊勢物語

眞字即ち漢字の音訓を以て書せり六條本といふ村上天皇の第八皇子六條宮員平親王の御撰といふ加茂眞淵翁は次に此書を信託伊勢物語古意といふ書の本文も全く此書に依れり然るに本居宣長翁は其著玉勝間  
に於て其文字の用ゐる方も其拙く後世好事の徒が萬葉集に倣ひて作りたるものにて六條宮の撰にあらずるべく中には參考にすべき所なきにあらずるも加茂翁の如く全く信すべきものにあらず恐く後世の偽作な  
らんといはれたり

綾太理校訂舊本伊勢物語

綾足の校訂といへども後世のものにて校訂者といふ人の偽作ならん本居翁はいへり

時頼本

片假名もて書けり奥に貝平親王相傳本とあり又寛永三年中秋上六日平時頼と書せりといふ

参考伊勢物語

屋代弘賢の校正せしものなり塗籠御本、眞字本、爲家爲相時頼の諸本を校合せしものといふ

中院大納言自筆本

爲家卿本なりといふ

藤谷黃門卿本

爲相卿本といふ

伊勢物語圖繪

市岡猛彦の校正なり

此外猶伊勢物語と稱する書は種々坊間に散見せり以上の諸書も未見の書も多く存在せる事を聞見せしものなれば如何なる書なるかを一々論すべきものにあらず原本にして既に然り註釋本は一層多く殆ど枚舉に遑わらず今其主要なるものを擧ぐれば

伊勢物語髓腦

一卷

作者不詳

同 知顯抄

三卷

作者不詳

共に疑撰して取るに足らずといふ

|           |     |     |       |                     |
|-----------|-----|-----|-------|---------------------|
| 同         | 愚見抄 | 五卷  | 一條兼良公 | 版本なり續類徒には一卷にして二本となる |
| 同         | 宗祇抄 | 一卷  | 宗祇法師  | 宗祇山口記と稱する書なり        |
| 同         | 惟清抄 | 二卷  | 船橋宗尤  | 寫本にして續類徒本にあり        |
| 同         | 肖聞抄 | 二卷  | 牡丹花肖柏 | 寫本                  |
| 同         | 闕疑抄 | 五卷  | 細川幽齋  | 版本                  |
| 伊勢物語難義註   |     | 一卷  | 作者不詳  | 寫本                  |
| 同         | 集註  | 十二卷 | 一華堂切臨 | 版本                  |
| 同         | 初冠  | 五卷  | 加藤槃齋  | 版本                  |
| 同         | 勅講抄 | 二卷  | 後水尾帝  | 寫本                  |
| 同         | 拾穗抄 | 五卷  | 北村季吟  | 版本                  |
| 勢語臆斷      |     | 四卷  | 圓珠庵契冲 | 版本                  |
| 伊勢物語童子問   | 十三卷 |     | 荷田春滿  | 寫本                  |
| 勢語七考      | 一卷  |     | 加茂真淵  | 寫本                  |
| 伊勢物語古意    | 四卷  |     | 加茂真淵  | 版本                  |
| よしやあしや    | 一卷  |     | 上田秋成  | 古意に附す               |
| 伊勢物語童子問修刪 | 二卷  |     | 度會末雅  | 寫本                  |
| 伊勢物語題號考   | 一卷  |     | 加藤直兄  |                     |
| 同         | 章甫抄 | 八卷  | 岨山春幸  | 版本                  |

勢語通

二卷

五井純禎

伊勢物語殘考

三卷

作者不詳

版本

勢語諸註集解

十本

作者不詳

寫本

勢語臆斷別勘

一卷

伊勢貞丈

寫本

伊勢物語傍註

二卷

加茂季鷹

寫本

同 參考附錄

一卷

同 新釋

六卷

藤井高尙

版本

同 添註

二卷

清水濱臣

寫本

勢語密議

一卷

山下清臣

寫本

伊勢物語箋

二卷

橘 守部

寫本

伊勢物語讀本

一卷

三浦千春

寫本

添註伊勢物語俚言解 二卷

佐々木弘綱

版本

此の如く肝牛充棟も雪ならず然れども皆殆んど甚しき相違もなく殊に拾穗抄以前ものは一向取るべきもの少なく髓腦知顯抄の如きは妄誕虚説を交へ笑ふに堪へたるものなり拾穗抄も始めは譬く行はれたるものなれば臆斷古意の如き諸註の出づるに従ひ漸く行はれざるに至れりされども新説の釋義少なからず當時の著としては季吟が湖月、春曙、文段の諸抄と共に賞すべきなり臆斷は種々言語の起源なども古書に徴して論じたれども初學者の爲には未だ整はぬふしあり古意は亦一新機軸を出して大に事實などをも論じたり新釋は最も粹を抜きたるものにして多くは此書に於て意義不明の如きも

明かなるに至り猶批判すべき註釋なきにあらざるも先づ大成さるゝものなり以上臆斷以下は最も良き註釋なり俚言解の添註は清水濱臣の添註に佐々木弘綱の俚言解は語句の簡單なる天爾遠波の略されたる所に語句を添へられたるものなれば初學者には最適當の書なり近頃伊勢物語も評釋といひ講義と稱して出づるものも頗る多きも皆此等の諸註より參考せしものに外ならず中村秋香氏が摺釋なるものを昨今物せらるゝは諸註を參考して更に其見を添へられ頗る卓見の所多しとす

#### 八、 結論

さはれ伊勢物語は文學上の至寶なり歴史上の良材なり奈良朝より平安朝に遷るの間に生れ出で想は平安朝の優柔懦弱に偏せるにもかゝはらず文は素樸簡勁の態を殘留し之一層の進歩を示し大怪物と稱すべき業平が生涯の一斑を描出して或は悲慘となり怨恨となり或は風雅となり優美となり諧謔となり痴情となる其文の巧緻簡古なる其詠の深意巧妙なる然も其事實の取るべき所あるは最此書の特色にしてくだしく既に述べたる所なりとす實に此書は竹取物語と共に物語文の始祖と仰ぐべく萬葉集に次ぎて歌集の先驅と稱賛すべく然も其文は模範とするより寧ろ古体とまで仰ぐべきものなりあはれ此書を讀まん者精讀熟閑取捨宜しきを得て之を玩味すれば其隱微の間更に文學上として巧妙なる點歴史上として珍奇の事實も伏在するやらんも計るべからざるなり余は爰に唯此書を以て奇書妙書と稱して此論を終る所なり